

みる かたる つくる

2021 VOL.48
(通巻110号)



ART NEWS

千葉県立美術館報

企画展「漆黒のモダン 漆芸家 佐治賢使展」開催中!



佐治賢使《晨明》(部分)昭和51(1976)年 個人蔵

開催概要

会 期 / 令和3年10月30日(土)～令和4年1月16日(日)

※前期:10/30-12/5 後期:12/7-1/16

開館時間 / 午前9時～午後4時30分

休 館 日 / 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌火曜日)、
年末年始(12月28日～1月4日)

入 場 料 / 一般500円 高大生250円(中学生以下・65歳以上・
障害者手帳をお持ちの方と介護者1名は無料)

主 催 / 千葉県立美術館

◆漆との予期せぬ出会い

佐治賢使(1914-1999)は岐阜県多治見市出身の漆芸家です。佐治を育んだ多治見市は陶磁器造りで知られますが、土地柄も佐治自身も漆と無縁でした。美術を志した佐治は、上京して東京美術学校を受験しますが、本人曰く、田舎育ちで美大受験に特化した勉強もしなかつたので第一志望の図案科は不合格でした。しかし佐治の知らぬ間に父が願書に書き添えた第2志望先の漆工部に合格し、入学します。

◆美校時代 デザインと漆に明け暮れる日々

戸惑いながらも漆工部で学び始めますが、首席で卒業します。卒業制作《化粧箱》(写真)はベッコ甲の赤トンボと卵殻のススキに真珠を配した秋の風物詩が描かれ、学校買上げとなります。フタを開けると思いがけなく紅色の鏡台が現れます。

その一方で学校に多い時は週に一度は来ていたというデザインの懸賞に応募し続け、一度も落ちなかつた上に入賞までしていました。

◆金沢時代 伝統工芸の本場を体感する

卒業後、同校研究科在籍を経て金沢に移住し石川県立工業学校教諭となります。工芸史の教授が金沢の工芸学校の校長として赴任する際、殆ど面識の無かつた佐治のことを、廊下に始終貼りだされていた懸賞で記憶していて、是非にと誘った事がきっかけでした。

金沢で見た若い作家達のモダンなデザインと独創的な作風は佐治を驚かせ、漆芸への迷いやわだかまりが解けて制作に没頭します。文展の搬入日には金沢駅の東京行きのホームが出品者で溢れたといえます。

ある時、学校の屋根の雪下ろしが原因で体を壊し保養所に入った佐治は、学校をやめ、本格的な作家活動に入りましたが、金沢の人達は美術学校出というだけでは何も教えてくれませんでした。全て自ら考え、試行錯誤するうち周囲から認められ、金沢の作家達との交流が盛んになり、東京に戻ってからも続きました。

金沢は江戸時代以降の加賀前田藩の工芸振興により城内に京都や江戸から名工を指導者として招き、金工・漆工等の工芸職人を養成しました。彼等は後に町方でも仕事をしたので工芸品は町民の間にも普及し、今なお数多くの職人工房が集まっています。

佐治はこの町から工芸の技術や伝統を体感していったのでしょうか。昭和18(1943)年第6回新文展、昭和21(1946)年第1回日展、昭和22(1947)年第3回日展で特選を受賞。昭和19(1944)年文展戦時特別展出品作《蝙蝠蒔絵八角飾箱》で政府買上となります。昭和24(1949)年に金沢を離れ、東京で新しい時代の工芸を模索します。

◆千葉での本格的な制作活動

その後、昭和29(1954)年40歳の時に千葉市川市国府台に移り住み、没するまで45年間をこの地で暮らし、以下のような作品を制作しました。

- ①《追想》、《都会》等のミロやカンディンスキーを思わせる幾何学的な形を配した屏風や衝立、棚の作品。
- ②《蝕》《水》《晨明》(写真)等の虫たちの密やかな生態が繰り広げる小宇宙を表現した作品。
- ③《寂夜》《彩夜》等の主に夜景を主題とした幻想的な作品。《ドライブウェイ》のような昼間の風景作品。
- ④植物と昆虫が織りなす神秘的な情景を描いた《つゆ草》《爽》《宴》(写真)などのお盆。

佐治の作品は多彩で大胆な画面構成が特徴的でありそのセンスは東京美術学校時代の懸賞応募でも発揮されています。そのデザインを生かすべく、絵画のような色調の変化を見せる色漆、金銀青緑の蒔絵、七色に煌めく螺鈿、卵殻、ベッコ甲、真珠などが要所要所に艶やかに散りばめられて、佐治独自のシックでありながら華やかな格調高い世界を作り上げています。



佐治賢使《化粧箱》
昭和13 東京藝術大学蔵



佐治賢使《宴》昭和57 個人蔵

展覧会予告

会期 / 令和4年1月25日(火)～3月21日(月・祝)

山本大貴 - Dignity of Realism -

千葉県出身の山本大貴(やまもと・ひろき 1982年生まれ)は、次代の写実絵画を担う画家として、最も注目を集める画家の一人です。



孤愁の窓辺

2021、162.0×97.0cm、個人蔵

本展は、山本が主要なテーマとする5部で構成します。写実を自己の道と定める確固たるものを持ちながら、方向性を探っていた初期作品。《孤愁の窓辺》等、クラシックなドレスを纏い、綿密に計算された豪華な調度に囲まれた女性像。ヘッドフォンを装着するなど、現代の一断面を見るような作品。《Standing Figure (feat. IKEUCHI Hiroto)》等、

造形作家の池内啓人が制作した精巧なデ

山本は武蔵野美術大学で油彩の古典技法を学び、初期から一貫して写実表現を追求しています。学生時代から白日会展に出展するほか、毎年一回の個展を重ねてきましたが、美術館としては初の個展となります。本展では、卒業制作など学生時代の作品に始まり、今年制作した最新作まで、山本の代表作約40点を展示します。

造形作家の池内啓人が制作した精巧なデ

バイスにインスピレーションを得た近未来的な作品。しなやかな身体のパレエダンサーを描いた作品。いずれも、写真と見紛うばかりの精緻で緻密な描写が特徴です。



Standing Figure (feat. IKEUCHI Hiroto)
2020、162.0×112.0cm、個人蔵

近年のブームで、写実絵画は数多く見られますが、その中でも、山本の作品は独特の個性を放っています。その個性は、「現代性」と言うべきものでしょう。1980年代に生まれた山本は、黄金期の週刊少年ジャンプを読んで育ち、画家を志すよりも前から漫画に親しんできました。アニメやデジタルなイメージ等、刺激的なビジュアルも数多く生まれた時代に育った山本ならではの感性で、現代のリアルが描き出されています。

1980年代生まれの感性が捉えた「現代」は、親しみやすくわかりやすい面を持っています。わかりやすさとストイックな努力の賜物である高度な技術の共存により、写実絵画の新たな可能性が提示されます。

(学芸課 松田直子)

特集 野外彫刻の作品修復

美術館正面玄関附近に浅井忠の銅像があります。高さ2.4mに及ぶ、来館者を迎える、美術館のシンボリック存在です。この像は、昭和53(1978)年に、千葉県美術会が県展30周年記念事業のひとつとして計画したものです。千葉県美術会結成の中心であった彫刻家・大須賀力が制作しました。完成から43年、比較的初期に何らかの処置として行われた黒いコーティングが剥げて、元のブロンズとまだらになった状態で長らく放置されていましたが、今年度修復が実現しました。

修復は、野外彫刻の鑄造・修復の豊富な経験を持つ黒谷美術株式会社が行いました。黒いコーティングは、ロウ状のもので、堅牢性を保つには不十分のため、パーナーであぶって除去した後、着色して保護処理を行いました。



浅井忠像 修復前



浅井忠像 修復後

た。ロウ状のもの除去は容易でなく、着色は強めに入れました。彫刻の存在が風景の中に浮かび上がり、顔の表情や彫刻としての豊かな量感がよみがえったようです。

浅井忠像の隣、藤野天光の《ああ青春》と総合受付前中庭、大須賀力の《椅子の女》も同様に洗浄・修復しました。

(学芸課 松田直子)

コレクション展

コレクションの展示は「常設展」などの名称で、国内各館で実施されています。千葉県立美術館でもこの名称で開催していましたが、後に「アート・コレクション」と変更、令和2年度からは「コレクション展」と再変更して開催しているところです。ミレーなど知名度が高く人気の高い作家の作品をなるべく鑑賞していただけるようにする「名品」枠を基本に、水彩画、金工など、様々な切り口で構成するテーマ展示の、大きく2つの区分で開催しています。

開催中、開催予定のコレクション展



《マドモアゼル・フランソワ》
茨城県近代美術館蔵



《三人の浴女》
埼玉県立近代美術館蔵



《少女像》
千葉県立美術館蔵

第4期 名品4 ルノワールと女性をめぐるイメージ
ルノワールの初期から晩年までの画業を振り返る展覧会は見応えがありますが、今回は特にルノワールの1917年前後の作品にスポットをあてました。

茨城県近代美術館《マドモアゼル・フランソワ》は1917年、埼玉県立近代美術館《三人の浴女》1917-1919年、千葉県立美術館《少女像》は1916-1918年の制作です。3作品いずれも1917年为重なり、この年は、第一次世界大戦の最中であり、ロシア革命が起きる

など激動の時代でした。同時期に制作された各作品の魅力をお楽しみいただけます。

第5期 名品5 -肖像画を中心に-

同時期開催の「山本大貴 - Dignity of Realism - 」と関連し、収蔵品の中から肖像画作品を中心に紹介します。

リアリズム絵画の創始者であるクールベをはじめ、写実表現を追求した洋画家・椿貞雄による《横堀角次郎兄像》や、晩年期となる京都時代、肖像画をよく描いた浅井忠の《婦人像》などを紹介します。

学芸員が選ぶ「この一点」

佐治賢使《さやか》



佐治賢使《さやか》昭和60(1985)年
漆芸
幅53.2cm×奥行31.5cm×高さ125.0cm
第17回改組日展

企画展で紹介する佐治賢使が、その主たる作品発表の場であった日展に出品した作品です。「さやか」という題名の意味は不明ですが、自然の美しい風物とされる花鳥風月に題をとり、作品正面左側より順に、月、鳥、花を配しています。月は青く、まるで異世界の光のように輝き、卵殻で構成した鳩は、漆黒と美しい対比を見せています。赤い木蓮の花びらの優美な様子は、舞を舞っているかのようです。

実用品としては、月の部分を取っ手として、右方向に扉が開く棚です。この棚に何を入れるか、どんな使い方が出来るかなどを考えてみるのも一興です。

漆工芸の作品は、完成までに厳密な工程管理が求められます。時には数十回にも及ぶ塗りと砥ぎを繰り返しながら、削り取った表面に卵の殻や貝など、他の素材を埋め込んで装飾しています。この気の遠くなるような工程を経て、それだけの作品が完成します。

本作品出品の前々年、佐治は日本芸術院会員になるなど、作家として充実期を迎えました。今回の展覧会は、佐治の他の作品と同時に鑑賞できる、またとない機会です。

(学芸課長 中松れい)

地域連携事業

「100人ワークショップ・等身大から始めようー自然木で組み上げるー」

「100人ワークショップ・等身大から始めようー自然木で組み上げるー」は、千葉県立美術館と千葉大学教育学部加藤修研究室との連携事業として、平成22年度より実施しているワークショップです。県内の中学校美術部等の生徒たちが集まり、千葉大学の学生（千葉大学普遍教育教養展開科目「アートをつくる」受講生）がファシリテーターとなって、自然木を材料としてシュロ縄で結び、組み上げて巨大なオブジェを協力して完成させるワークショップです。



昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりましたが、11回目となる今年度は美術館・中庭(芝生広場)を会場に、11月13日(土)・7校67名の中学生が参加して開催しました。1日ばかりで出来上がった作品は11月28日(日)までの2週間、芝生広場に展示されて、多くの来館者の目を楽しませてくれました。

「成田アート博覧会」

成田市にある成田山参道の仲町商店街を会場に、アートプロジェクト「第11回成田アート博覧会」が開催されました。今年度は仲町商店街を学区とする成田市立成田中学校が主催し、千葉県立美術館、成田小学校、成田市観光協会、仲町街づくり協議会が協力する形で開催することとなりました。



仲町商店街の30店舗に加え、成田観光館3Fギャラリーに成田市内で学ぶ小・中学生の参道を描いた約60点の絵画作品を中心に、国際色豊かな鑑賞者を想定して、日本語と英語による作品解説文を添えて店頭に展示しました。

商店街は「成田山公園紅葉祭り」と重なる11月13日(土)から28日(日)までの期間、賑わいの中にもちょっと素敵で楽しい街角美術館になりました。

実技講座 予告 篆刻

令和4年 1/18(火)・1/25(火)・2/1(火)・2/8(火)

篆刻は今から400年ほど前、中国で書画の発達とともに確立しました。日本では室町時代以降、書画に押されており、その後も中国との交流などにより、篆刻芸術は現在に至るまで盛んです。自身の書画作品に、高名な篆刻家の印や自刻の印を押すことで、喜びや楽しさが高まるとともに、書と彫刻の要素が加わり、工芸としての面白さも出てきます。



この講座では、ご自身の姓名などから文字を選んで、書画に押す雅印(落款印)をつくります。今年度の講師は、篆刻家の和中簡堂先生です。日展会員で、全日本篆刻連盟副理事長を務めている先生のご指導で、漢字の知識とともに、篆書のデザイン性、装飾性を取り入れた篆刻制作をぜひ体験してみませんか？

※申込み期限 令和4年1月4日(火)

ワークショップのご紹介

当館では幼児から小学生までを対象としたワークショップを随時開催しています。今後については、以下のワークショップを予定しています。

詳しくは当館ホームページをご覧ください。

・[スプリングワークショップ

春を見つけようー万華鏡の世界を楽しむー]

日時：令和4年2月19日(土) 13:00～14:30

ミラーペーパーで三角鏡をつくり、美術館の館内や外を探検して春の景色をのぞいてみましょう。

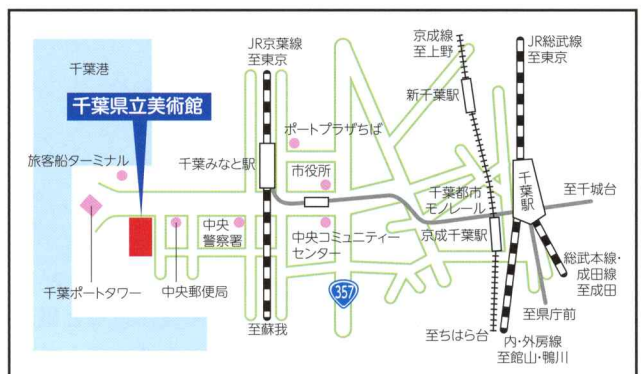


※申込み期限 令和4年2月5日(土) 必着

【新型コロナウイルス感染症対策について】

千葉県立美術館は、新型コロナウイルスの感染防止対策を講じた上で開館しております。

ご来館の皆様におかれましては、当館受付・HPに掲載しております「感染拡大防止へのご協力のお願い」をご確認いただきますよう、お願いいたします。



〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1
Tel.043-242-8311 Fax.043-241-7880
URL:<http://www2.chiba-muse.or.jp/ART/>
千葉県立美術館報「みる かたる つくる」VOL.48

(通巻110号)
令和3(2021)年11月30日発行

